

申請者: 西山一弘

論文題目: 時価主義会計論の研究
—1960年代から70年代の英語圏における学説を中心として—

審査員 佐々木隆志
新田 忠誓
伊藤 邦雄

本論文は、今日の企業会計において顕著となっている時価情報の開示を強める傾向に対して、その理論的基礎を与えたとされる1960年代から1970年代の英語圏で提唱された諸時価学説を検討し、各々における損益計算観および会計観を明らかにした上で、これらの検討を今日の企業会計にあてはめその方向性を考察するものである。

本論文の評価すべき点は、次のとおりである。第1に、時価主義会計論を入口の時価による時価主義会計論と出口の時価による時価主義会計論とに大別し、損益計算に焦点を当ててそれぞれの特徴を詳細に検討した点である。これによれば入口の時価による時価主義会計論は、時価を用いた費用と収益の対応を重視する損益計算を特徴とするとされ、一方、出口の時価による時価主義会計論においては、会計数値の目的適合性と客観性を重視した貸借対照表における損益計算が特徴であるとされる。第2に、同じ種類の時価を用いる時価主義会計論であっても相違が存在する点を、その会計システムを分析することによって明確にし、その相違を損益計算観あるいは会計観と結びつけた点である。入口の時価による諸時価主義会計論においては、予定した資本維持の思考から資産の保有損益の取り扱いに相違が生じており、一方で出口の時価による諸時価主義会計論においても、会計情報の目的適合性と客観性のどちらを重視するのかによって相違が生じていることを指摘している。第3に、現代の公正価値会計を出口の時価による時価主義会計と位置づけつつも、反面、そこに収益と費用を対応させようとする思考が内在している点を指摘し、企業会計における収益費用の対応が依然として重要であることを示唆した点が挙げられる。

しかしながら、本論文には次のような問題点がある。第1に、検討された時価主義会計論の選択理由にやや曖昧な点があり、学説の位置づけによっては、異なる結論になる場合がないとはいえない点、そして、計算構造の分析を課題としつつも、一部の学説においてその検討が不十分と思われる点である。第2に、出口の時価による時価主義会計論と位置づけた現代の企業会計に対し、収益費用の対応がどのような影響を及ぼしているかについての考察が必ずしも十分とはいえない点が挙げられる。

以上のような課題は存在するものの、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の著者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取り扱いにより、一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。